

手引の程度を越える事はむづかしいであらう。此に反し、木炭デッサンの課業の充實は刻下の急務であり、現に行ひつゝある勉強の効果を更に徹底させるに過ぎないのだから遙に實現簡單なりと思惟する次第である。

工藝科の方では伊原宇三郎先生がその指導に當られ非常な熱心さでピシ／＼直して頂ける由である。私は羨望にたへない。

今日の日本畫に缺けて居る物はどつしりとした重み、大きさ、質感、實在感である。東洋の古名畫の大き、緊密さ、重さは今日の我々には洋畫的な、物に對する見方から、始めて之に近附き得るのではあるまいかとさへ思へる。近時多く見られる日本畫の友禪文様の、圖案的なるは此の實在感の不足に依る物である。

若し今の木炭畫デッサンを、伊原先生の如き洋畫の専門家の嚴しい指導下に置いて、明日の若き日本畫家群の繪畫的根底を固めると同時に、結城先生始め日本畫の諸先生の手による日本畫の傳統的優秀さに對する啓發が積極的に行はれる様になつたならば、此の美校の日本畫科は必ずや來る可き日本畫界の原動力となり日本畫壇のレベルの向上に資する事大なるを信じて疑はないのである。

私もすでに三年、卒業まで僅か一年半を残すのみであるが、一般總務委員^{〔委〕}を拜命するに當り、一年前の丁度今頃、各クラスより提出された希望書再讀の機會を得絨上の感を深くする事新に此處に拙文^{〔本〕}を草せる次第である。

日大畫百名の生徒諸君、以て如何と爲す。

『東京美術』第十一号。昭和十二年六月

⑮ 『東京美術』創刊

昭和十二年六月三十日、従来の校友会機関誌『校友会會報』は標題を『東京美術』と改められ、号数は旧誌第十号に引き続いて第一号として発行された。毎年二、三回発行され、昭和十五年二月発行の第十八号で廃刊となつたこの機関誌は、大きさこそもとの『東京美術学校校友会月報』と同じB5判に戻つたが、内容は著しく異なり、文芸雜誌的傾向が強いものとなつた。因みに第十一号の目次は次のとおりである。

ヒューマニズムと繪画に就いての覚書

小松 清

現代文学の問題

伊藤 整

ヒューマニズムに就いて

杉山 平助

白い手紙

山口 寅夫

地の人

杉本 博

斑猫・外

遠藤 健郎

透明なる果実

山口 寅夫

麦

井手 則雄

「DATE 210」

塩釜 忠磨

東西繪画の伝統技術の追求とその克服

若林喜久平

廿世紀的性格の一つ

梶田 英一

所謂新日本画より学校に於ける我々の仕事を思ふ

猪飼 俊一

○校友会各部報

○校友会記事

○文庫彙報

編輯後記

本誌は「會報は本來或意味での教養機關である可きだ、それは當然文藝的色彩の中で發展されなければならない。」(同誌所載第十二号原稿募集広告)という主張のもとに文芸誌的性格を打ち出すべく、小松清、伊藤整といった著名人の寄稿によって創刊号を發行したものの、次号からは外部に寄稿を求めることが出来なくなり、やがてその同人雜誌的な編集方針に対する批判が起こった。第十八号(最終号)の編輯後記には和田某の次のような反省が記されている。

従來の會誌編輯委員の中には、校友會誌本來の本質を知らず又校友會誌の使命を探究せず、徒に時代の表面を流るゝ潮流に押し流されて、肝腎の美術學校本來の特質を考へなかつた。従つて校友會誌の使命と本質を生かす事が出来ず、小さき個人の小智を生かさんと努力して東京美術學校から遊離せる如き状態さへも現出するに到つたのである。而して、個人的なる趣味と技巧の問題を以て主眼となし、徒らに外觀的體裁のみに腐心し、且内容本質を閑却して來たのである。甚だしきは自己の狭小なる知識を誇らんがためとか、或は己れの趣味のためとか、非常に自由・氣盡なるセルフイッシな考へに依つて、學校全體の校友會誌を利用したり、或は又、利己的にして不正なる思想の喧傳に利用したりした時もあるたのである。或は又、校友會誌の存在價値と、其の歴史的價値に對して全くの無思考且つ無關心の徒輩が其の場ごまかしの編輯をしたりした時も見受けられたのである。従つて生徒諸君の不平・不満は勃然として起り、又諸先生方の間に於ても同様に、其

の聲は大きく、中には校友會誌を全く見放してしまつた先生方も居らるゝ程である。

時代的風潮によるものか、一時の思い付きによって、明治二十七年以來受け継がれて來た本校校友會誌發行の精神を顧みることなく、情報伝達、記録の機能を持たない文芸誌に変えてしまつたことは、今日から見ても大いに批判すべき点であり、學校当局の姿勢にも疑問が感じられる。

こうした反省に立つて第十八号は一転して校長の論説や岡田三郎助追悼の論説、青年勤勞奉仕隊参加記、見學旅行記、各科教室記事、校友會記事、學校行事、文庫彙報など、學校全体に関わる題材によって構成するというかたちになり、第十九号は『東京美術學校校友會誌』と改題されて、昭和十五年十月に發行された。これによつて従來の編集方針が復活したが、その後間もなく校友會の解散という事態が生じたため機関誌の發行が跡絶え、戦時体制が続く中で、先人の叡知と努力の跡は遂に顧みられることがなかつた。

校友會機関誌『錦巷雜綴』『校友會雜誌』『東京美術學校校友會月報』『校友會會報』はよく情報伝達、記録の機能を果たし、今日において史料の價値を増々高めている。これらの發行が続いた背景には美術の学園に學ぶ人々の一体感と、唯一の国立美術學校の教員あるいは生徒としての意欲、誇り、責任感と、特に學校当局の強力な指導精神があつたように思われる。刊行の杜絶はそれが損われたことを意味している。